慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	著者リプライ 『世界の儚さの社会学：シュッツからルーマンへ』書評論文リプライ
Sub Title	
Author	吉澤, 夏子(Yoshizawa, Natsuko)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2005
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.10 (2005.) ,p.147- 149
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20050000-0147

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

著者リプライ

『世界の儚さの社会学——シュッツからルーマンへ』書評論文リプライ

吉澤　夏子

出版から3年という時間が経過している拙著を、書評本として採り上げるという決断をしてくださった『三田社会学会』編集委員会のみなさま、および書評をお寄せいただいた徳安彰氏に、まず感謝の意を表したいと思う。とりわけ評者の徳安氏にはお忙しい中、氏のお仕事にとってあまり有益とも思えない拙著を、誠実に丁寧に読み解いていただき、さまざまな貴重なご意見をいただけたことは、たいへん有難く心からお礼を申し上げたい。以下ご指摘いただいたいくつかの論点について、私自身の議論を改めて敷衍するかたちでお答えしていきたいと思う。

まず、ルーマン理解について多少のずれや違いがあることは当然にしても、評者が拙著の議論のエッセンスについて、きわめて的確に理解してくださっていることを確認することができ、端的にうれしく思っている。それはシステム論と現象学という「論点」である。私もいわゆる「オートポイエティック・ターン」という見方にはあまり必然性を感じない一人である。私の議論ではむしろ『社会システム論』が一つの到達点であり出発点であるという視点から、ルーマンの学的営みの根底にある「世界観」に照準を合わせている。現象学（フッサール）とシステム論（ルーマン）の間に直接的な接合点をみいだそう、あるいはシステム論を現象学的に理解しよう、というのではない。両者の志向する世界の偶有性が、両者の方法の対照性によって鮮明に浮かび上がる、という事実に着目しただけである。ルーマンの「社会理論のメタ理論的展開」とフッサールの「超越論的現象学＝普遍的存在論」は、まったく正反対の場所から見上げた同じ山の頂なのである。用語や概念における共通性（だけ）ではなく、こうした世界の捉え方そのものに両者の通底性をみているということである。

このことは構成 Konstitution という概念にも関連してくる。私は、構成という概念をまず厳密な意味で現象学的に把捉したうえで、ルーマンの「ラディカル構成主義」が、シュッツを淵源とする、社会構築主義的な方向性と社会生成論的な方向性という二つの流れのうち後者に位置づけられるということ、すなわち、フッサール的な「構成」概念に連なる学的基盤をもつことを示した。ここで重要なことは、ルーマンが自己指示的システム理論という社会理論の展開によって、構成主義という認識論的な立場を呈示しようとしたということである。どのようなかたちにせよ、認識論が問題ならば、近代以降それは必然的に「他者問題」を包摂する。もちろん評者の指摘するように、社会生成論的立場のメルクマールは他者の存在の問題化だけではないかもしれないし、「社会システムによる世界構成の自己言及的、再帰的なメカニズムこそが「構成」の重点である」という点についてまったく異論はない。

しかし他者問題は、私の考えでは、そうしたメカニズムの手前に、あるいは同時に立ち上がってくるものであり、別個のものではない。評者は、他者（主観、主体）／システム、あるいは心理システム／社会システムという二元図式に依拠しているようにみえる。この点が、私と評者とのルーマン理解に若干の違いをもたらしていると考えられる。「社会理論のメタ理論的展開」という定式化には、たとえば主体／システムといった二元論自体が無効になる地点が含みこまれている。私の議論では、システムということばが、おそらく最大限「広義」に解釈されている。確かにルーマン自身も、個別の具体的な領域について語るときはいわゆる「狭義」のシステム概念を用いている（したがって世界=システム＋環境となる）。しかし本書の中心テーマとしてとりあげているのは、あくまでルーマンが自己指示的システム理論、オートポイエーシス理論として自らの理論を位置づけるとき、その背後に働いている隠れた世界観である。あらゆるシステムが環境との差異によってその統一を得るとき、世界も同時に同定されている、と考える。そのとき世界はすなわちシステムである、といいうる。

このような視点から、私は心的システムについて語るというより（あるいは語りながら）、そこからシステム（という概念）そのものに普遍的に通底する形式を取り出そうとしたのである。もちろん、こうした試みが十分に達成されているか、またそうした道筋がどれだけ説得力のある議論として呈示されているか、という点についてははなはだ心もとない。したがって評者の疑問は、私の議論の未熟さゆえの当然の結果であり、この点が今後の大きな課題であることは十分承知している。私も、「現象学とシステム論の連続性と断絶を解く鍵は、まさにルーマンの自己言及的な社会システム論にある」という評者の言葉に深く共感するものである。この点だけは明らかにしておきたいと思う。

さて、ルーマンの引用文の翻訳に関して一箇所具体的な指摘をいただいた。künstlich-begradigte Streckn という原文に対して私は「人工的に引き延ばされたもの」という訳をあてた。評者はこれを誤訳とし「人為的に一直線にされた道」が正しいという。しかしこれには正直首を傾げざるを得なかった。まず邦訳の「人為的に中断されたコース」という訳に比べても、両者は訳語そのものとして近い意味をもっている。「人工的」と「人為的」ほぼ同じ意味といっていいだろう。違いは「引き延ばされたもの」と「一直線にされた道」にあると思われるが、これはほとんど解釈の違いといっていいのではないだろうか。それは結局、それぞれがこの引用箇所によって何をどのように議論しているかということ、それぞれのいわばルーマン「解釈」にどのくらい説得力があるか、という問題に帰着する。評者は「この部分は、とくに世界構成のメカニズムの根幹を論じているだけに、正確を期して欲しかった」と述べているが、私もこの箇所を自分の議論の中心的な論点を呈示するきわめて重要な論拠として引用している。

拙著の中で詳述しているように（126〜129 頁）、ルーマンにおいては、われわれがこの世界に生きているということが、すでにつねに自己指示（循環性）の使用であり展開であり「脱トートロジー化」（脱パラドクス化）である。私たちはあらかじめ何からの秩序のある世界に、すでにつねに生きている。逆にいえば、私たちは世界を秩序あるものとして認識する以外に世

界を理解するすべをもっていない。私たちは、たとえば過去と現在と未来が同時に在るというパラドクスを現に生きているが（パラドクスの実践）、生きているという認識（脱パラドクス化）は、過去と未来が現在をはさんで一直線になっている時間の「非対称性」によって可能になる。「体験や行為の基礎となる非対称性」は、いわばパラドクスが「引き延ばされている」（つまりたとえば立体が展開図になっているという意味の「展ばされている」）結果である。そしてパラドクス化と脱パラドクス化は厳密に同時に起きているのである。私はそのような意味でこの訳語を選んだ。Streck という言葉には、距離、道のり、区間、行程、といった意味がある。「引き延ばされた」結果としてはじめて距離や間というものが生まれるのである。私の訳語は以上のようなルーマン「解釈」の結果選択されたものであり、意訳のしすぎであるという批判は可能かもしれないが、誤訳であるとは思っていない。

このパラドクスと脱パラドクス化の同時性に、おそらくルーマンの世界の「儚さ」がよく表われている。拙著では確かに「世界の非自明性も、〈できごと〉も、他者への到達不能性も、すべて同じ「儚さ」という言葉で語られている」。しかしそれは主に「はじめに」や序章など、拙著全体を貫く問題関心を明らかにする場面で、意図的に「レトリカル」に使われているのであって、本文記述における厳密さを要求されるような理論展開の中では、中心的な概念として使われてはいない。もしこのことばによって肝心の議論が曖昧なものとして印象づけられたとしたら、それは私の文章の完成度が低いためだと思われる。今後この点についてはさらに細心の注意を払いたいと思う。

（よしざわ　なつこ　日本女子大学人間社会学部）